

聖書箇所：ルカの福音書 10 章 1～16 節

説教題：神の国は近づいた

1 ガリラヤからエルサレムへ

前回の箇所で、イエスがエルサレムに行くとして御顔をまっすぐ向けられたことを見ました。それまではイスラエルの北にあるガリラヤ地方を中心に宣教活動してきましたから、大きな方向転換をしたこととなります。イエスにとってエルサレムに向かうことは、十字架に向かうことを意味します。十字架の死を遂げるまでガリラヤ地方に戻ることは二度とありません。

今日の箇所でイエスは、コラジン、ベツサイダ、カペナウム、この三つの町の名前を挙げております。いずれもガリラヤ地方にあって、かつてイエスが訪れたことのある町です。とても昔を懐かしんでいる様子ではありません。『コラジンもベツサイダもそしてカペナウム、お前たちは、やがて来るさばきの日にハデスにまで落とされるのだ』ひとことで言えばそのような意味です。ハデスとは、神がおられる天とは正反対の場所で、死の世界を指しています。

皆さんはここを読み、非常に厳しいという印象を持ったはずです。どのような思いをもってイエスが語ったのか、その本当の意味を探っていきます。まず三つの疑問を取りあげます。

2 三つの疑問

(1) さばかれる町？

まずイエスが挙げている町がどんな町であったのかを確認します。コラジンのことは

詳しくわかりませんがベツサイダとカペナウムについては、いくつかのことがわかっています。

十二使徒のメンバーであるペテロ、ピリポとアンデレ、いずれもベツサイダの出身です。盲人の目が開かれたのもベツサイダ。

イエスはカペナウムを拠点にしてガリラヤ地方の伝道を活動をしていました。ですから当然数多くのわががこの町の行われています。取税人であったマタイはこの町に住んでいて救われていました。

ベツサイダもカペナウムも、確かに町の人たち全員がイエスを受け入れたものではありません。でもそこではイエスに召し出されたり、病をいやしていただいたり、身体の障がいをいやしていただいたりして、罪を赦された人たちも沢山いたのです。

それなのに、これらの町は厳しいさばきを受けなければならない。もし本当にそうだというのなら、いったいどの町なら救われるのでしょうか。ますますわからなくなります。

(2) サマリヤ人の町は？

疑問の二つ目。前回の箇所で、イエスがサマリヤ人の町に入ろうとされたとき、サマリヤ人はイエスを受け入れなかったとあります。これを見た弟子たちは、「彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言って腹を立てています。これを聞いたイエスは弟子たちを厳しくしかつております。イエスを受け入れないので

すから、弟子たちが言うように厳しい罰を受けるのが当然のはずです。ところがなぜかイエスは、そのようなことを望んでいないような態度を取られました。

サマリア人の町で取られたイエスの態度と、今日の箇所ではイエスが語るみことば。一貫性がないように見えます。それが疑問の二つ目です。

(3) 不審な二人連れで

疑問の三つ目。イエスはこれから向かう町に対して、ふたりペアの弟子たちをあらかじめ派遣する方法をとっております。それはいいのですが、わからないのはその先です。1節以降に、イエスが弟子たちと与えた注意事項が詳しく書かれています。例えばそのなかの4節で「財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。」

これを読んで、皆さんはどう思われたでしょうか。ある日、自分が住んでいる町内を見知らぬ二人連れが歩いていたらとします。こちらがあいさつをしても二人連れは無視します。変な人たちと思えば家に帰ったら、しばらくして呼び鈴を押す者がいる。玄関のドアを開けると、先ほど道を歩いた二人連れの男性です。こちらがとまどっていると、この二人はいきなり「この家に平安があるように」と言うのです。これはもうどこかの新興宗教の勧誘にちがいない。「うちはキリスト教なので間に合ってます」と言って追い返したくなりませんか。

16節にこうあります。「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わした方を拒

む者です。」

弟子たちを受け入れないのならば、それはイエスを受け入れないのと同じ。父なる神を受け入れないのと同じ。そう言っています。皆さんはこう思わないでしょうか。そんなに大切なことならば、町の人たちがもっと弟子たちを受け入れられるように、いろいろ配慮してくれてもよいのではないか。例えば、弟子たちにもう少しまともな格好をさせる。もっと親切な態度を取らせる。そうしたらもっと多くの人たちは弟子たちを受け入れたのではないか。そういう疑問が湧きます。

弟子たちにちょっと近寄りたいたいような格好をさせ、不親切な態度を取らせ、それでたった一度、弟子たちを受け入れなかったというだけで、「さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだお前たちより罰が軽いのだ」と言われてしまう。これではあまりにもひどいと私は思います。

3 神の救い

(1) たとえ厳しく聞こえても

と言いましたが、冷静に考えると私たちは神に対して何一つ文句を言える立場にはありません。私たちは生まれながらに罪を抱え込み、神に反逆していた者です。罪ある私たちが、神に向かって、「それはあんまりだ」とか「もっと受け入れやすくすべきだ」と文句を言うのは、筋が通りません。私たちは神の怒りを受け、さばかれなければならない身分だったのです。

でも、そこで終わっていたのなら聖書は書かれなかったでしょう。神はそのような私たちをご覧になり、あわれんでくださって、なんとしても救わなければならないと堅く決心してくださいました。

その神の救いに関してですが、聖書を読んでいる私が最近ますます確信させられることがあります。神はあらゆる手段を使って、なんとしてでも私たちを救おうと最大限の努力と配慮をしてくださっている。たとえ、この箇所にあるような厳しく聞こえるみことばであっても、神が私たちを救おうとする思いにひとつも変わりはない。厳しく聞こえるのは、私たちがまだ神の御思いの深さを知らないからであって、もし神の御思いを私たちが本当に知ったなら、聖書のあらゆる箇所は恵みにあふれていくはずです。私はそう確信しています。今日の箇所も必ずそのように読むことができるはずです。

(2) ハデスにまで下るイエス

イエスはどのような思いで12節以降のことを語っておられたのか。最後に確認します。

イエスはエルサレムに向かおうとされています。ガリラヤに戻ることはできません。イエスは今、ガリラヤの人々のことを気にかけておられます。そのなかでも特にご自分を受け入れなかった人たちのことが気がかりなのです。

神が後悔される、と言ったら驚くでしょうか。神は正しい方であり、何一つ間違いを犯すことはない。それが神のご性質です。しかし、イエスはあの人たちを救うことができなかつたと、嘆き悲しむのです。まるでご自分の努力が足りなかつたかのように後悔する姿を私たちに見せます。イエスは、ベツサイダやカペナウムの人たちをさばこうとして、このようなことを語っているのではありません。すべての人たちを救うことができなかつたと言って、ご自分の無力さを嘆いておられるのです。

ではこのベツサイダの人々、カペナウムの人々、さばかれることがすでに決まってしまったのでしょうか。もう救われたいと言っているのでしょうか。

よく注意してください。イエスは十字架で死なれた後、どこに行かれたのですか。使徒信条を私たちは告白しています。「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬(ほうむ)られ、よみに下り。」「よみ」とはハデスのことです。この方は死んだ後、ハデスにまで下った。それが私たちの信仰です。そこにはだれがいるか。カペナウムの町の人たちがいます。ということは、主はハデスにまで落とされて、カペナウムの人たちと同じ苦しみを味わおうとしている。

そこで町の人たちが救われるのかどうか、それはわかりません。でも確かに主は、私たちが落とされていくどん底のどん底にまで行こうとされている。そうまでして、私たちが神の国に迎えようとしてされている。そのことは確実に言えます。

主はガリラヤに住むひとりひとりを思い起こします。それと同じように、主は私たちひとりひとりのことを心にかけてくださいます。特にまだ救われていない人たちがこれからどうなっていくのか、その事が心配です。

この方を受け入れ者にこう語ります。「神の国が、あなたがたに近づいた。」いっぽう、まだこの方を受け入れていない者にも語ってください。「神の国が近づいたことを、あなたがたは知っておいてください。」(私訳)

なぜわざわざこんなことを言うのですか。今受け入れなければもう望みがないというのなら、こんなことを言う必要はありません。

まだ望みがあるから言うのです。たとえ今受け入れなくても、主は救いの可能性を捨てないと教えているのです。

そうするとどうなりますか。主は私たちが救われるために最後の最後まであらゆる可能性を探り続けているということではないですか。そのために、主はハデスにまで下って私たちと同じ苦しみを味わおうとされているということになりませんか。

主の恵みの広さと豊かさを覚えて感謝します。